ERLを用いたILC陽電子源のための ガンマ線源の提案

第76回ERL検討会 PF研究棟2階会議室

加速器研究施設 第7研究系 島田 美帆

なぜERLか

Compact ERLの放射光利用

- レーザー逆コンプトン散乱による硬X 線やγ線の利用
- バンチ圧縮によるTHz-CSRの利用
 ↓
 ↓
- THz-CSRを用いた逆コンプトン散乱に よる軟X線源の提案



ERLの利点

- 逆コンプトン散乱
 - 常に質のいい電子バンチがくるため、集光しやすい。

□ CSR生成

- バンチ圧縮によるCSR wakeの影響が残らない。
- 常にエネルギー広がりの小さな電子バンチが来るため、バンチ圧縮が容易。
- □ 線形加速器に比べて大きな電流が可能。

逆Compton散乱とは

Compton Scattering

電子と散乱した後、長い波長の光となる。



散乱光の光子数:N_x

$$N_X = \sigma_T \, \frac{N_e N_p}{A}$$

入射光の光子数 電子数 散乱断面積 衝突面積:A

Inverse Compton Scattering (ICS)

短い波長の光となる。

相対論的な運動をする電子と散乱した後、

コヒーレントシンクロトロン放射(CSR)

1989年、東北大学核理研、線形加速器にて最初のCSRを観測

バンチ長より長い波長でコヒーレントとなる。
強度は電子数の二乗に比例する。





F(k): Form factor コヒーレント光の割合を示すパラメーター $F(k) = \left| \int \rho(z) e^{ikz} dz \right|^2$ $\rho(z): 縦方向の電子密度分布$

CSRによる逆コンプトン散乱(ICS)

Photon energy due to inverse Compton scattering

$$E_X = \frac{4\gamma^2}{1 + K^2} E_L$$

Head-on collision circular polarization

 E_X : Energy of scattered photon E_L : Energy of laser γ : Lorentz factor K: Deflection parameter



M. Shimada and R. Hajima, PRSTAB 13, 100701,(2010) 5

インコヒーレントなCSRの蓄積 電場を増幅させず、エネルギーを蓄積していく手法



- A) 電子バンチの進行方向ジッターが波長 よりも大きいと仮定。それぞれの電子 バンチのCSRのエネルギーが蓄積され る。
- B) CSRはキャビティの中で発生する。

$$P_{CAV} = \frac{P_{in}}{1 - R^n}$$

ICS by an external laser



- A) コヒーレントに蓄積するため、外部
 レーザーとキャビティ内のレーザーで
 位相が合っている必要がある。
- B) 外部レーザーは透過率Tのミラーを通 過する必要がある。

$$P_{CAV} = TF^2 P_{in} / \pi^2$$

E.R.Crosson et al, Rev. Sci. Instrum. 70, p.4 (1999)

Finesse:
$$F = \pi \sqrt{R^n} / 1 - R^n$$

P_{cav}:Power in a cavity, P_{in}:Input power, R: Reflectance, T:Transmittance, n:Number of mirrors

In both cases, pulse power is stacked by **1000 times** with reflectivity of mirrors 99.97%.

ILC偏極陽電子生成方法

電子を直接ターゲットに照射する方法も有力だが、偏極性を得られない。

1. Helical undulator



2. レーザー逆コンプトン散乱



- 周期長:~10mm
- 電子エネルギー:150GeV
- undulator長 : 100~200 m
- バンチ当たりの陽電子数:2x10¹²
- 偏極度:20~60%
- ・ レーザーの波長: 0.5 ~ 1μm
- 電子エネルギー:~1GeV
- 蓄積リングor ERLが必要。
- バンチ当たりの陽電子数:2x10¹⁰
- 偏極度:~100%

CO2レーザー(波長10µm)の案もある。

- 3. CSR 逆コンプトン 散乱
 - CSRの波長: 45 μm
 - 電子エネルギー:6 GeV (off crest 加速で)

電子エネルギーや波長(周期数)は 1.undulator案と2.LCS案の間に位置する。

逆コンプトン散乱によるγ線生成

ILCの偏極陽電子源に要求されるγ線

- 10 MeV以上
- 2 x 10¹² phs./pulse程度
 - 2 x 10¹⁰ phs./pulse程度ならダンピングリングで蓄積可能
 - ・ Flux は 10¹⁶⁻¹⁷ phs./s 程度
- 高い偏極度の円偏光



High Intensity γ-ray Source, HIγS 2 x 10¹⁰ phs./s @ 10MeV (Y.K.Wu et al,Proc. IPAC11)

CSR-ICSも、現実的なパラメータで検討した結果、 光子数が数10⁹phs./pulseと、一桁足りないことがわかった。

新しい発振方法の提案

光の強度を高めるためにCSRをコヒーレントにoptical cavityに蓄積する。



□ Cavityに蓄積された光の電場とエネルギーの交換を行う。

- □ 最初はFELの物理と同じアプローチ。
- 通常の放射光と異なり、Lienard-Wiechert potentialを直接感じるものではないため、正式にはCSRとは呼ばない。
- □ 今後、この波長45umの中赤外光を単に"光"と呼ぶことにする。

Vlasov equationによる表記

電子密度分布fはVlasov equationを満たす。

$$\frac{\partial f}{\partial t} + \frac{\mathrm{d}\phi}{\mathrm{d}t}\frac{\partial f}{\partial\phi} + \frac{\mathrm{d}\eta}{\mathrm{d}t}\frac{\partial f}{\partial\eta} = 0, \qquad f = \sum f_n(\phi, \eta, t) \left(\frac{\Omega}{\omega_0}\right)^{2n}, \qquad \frac{\Omega}{\omega_0} \ll 1$$

$$\Omega^2 = \frac{4\pi e\beta_{\perp}}{m_0\gamma_0\lambda_w}E_0, \qquad \eta = \frac{\gamma - \gamma_0}{\gamma_0}, \qquad \phi = \left(\frac{2\pi}{\lambda_w} + \frac{2\pi}{\lambda}\right)z - \omega t + \phi_0$$

- f : 電子密度分布
- E_0 : cavity内に蓄積されている光の電場
- U : cavity内に蓄積されている光のエネルギー

エネルギーの受け渡し(FELの場合) I

蛇行する電子が光の電場を感じ、エネルギーの受け渡しが行われる。

E Е•v

光の電場

アンジュレータ内の

電子の軌道



エネルギーの受け渡し(FELの場合) II

光の波長に比べてバンチ長が長い場合、バンチ全体の平均エネルギーは変化しない。

(エネルギー広がりは大きくなる。)



1項目がゼロ

エネルギーロス

エネルギーゲイン

• • • • • •

アンジュレータ内では加速した電子は前方に、減速した電子は後方にずれる。 すると**バンチング**が起き、波長λのコヒーレントな光を得る。



エネルギーの受け渡し(本手法の場合)

本手法の場合、バンチ長が波長よりも十分短く、すでにバンチングされている。



Free Electron Laser との違い

通常の固体レーザーの発振

$$\rightarrow$$
 エネルギー増加量はエネルギーに比例 $\frac{\mathrm{d}n}{\mathrm{d}t} \propto n$ n :光子密度

$$\begin{array}{c} <\eta>-<\eta_0>= \left(\frac{\Omega}{\omega_0}\right)^2 \int_0^{2\pi} \mathrm{d}\phi \int \mathrm{d}\eta f_1(\phi,\eta,t)\eta + \left(\frac{\Omega}{\omega_0}\right)^4 \int_0^{2\pi} \mathrm{d}\phi \int \mathrm{d}\eta f_2(\phi,\eta,t)\eta + \cdots \\ \uparrow \\ \Delta\gamma \propto \Delta U & \propto E_0 & \ast & \propto E_0^2 \end{array}$$

通常のFEL理論では * がゼロであるため、 固体レーザーと同じくエネルギー増加量は蓄積エネルギー U_0 に比例する。 $\Delta U \propto U_0 \propto E_0^2$ 従って、固体レーザーと同じように、自由電子を使ったレーザーと認識されている。 本手法では * が支配的→根本的に物理が異なる?

(ゲインが定義できない、など) $G=rac{\Delta U}{U_0} \propto rac{\Delta U}{E_{0_1A}^2}$





電子の位置
$$(x_B, y_B, z_B)$$
 $x_B(t) = \frac{c}{\omega_B} (1 - \cos \omega_B t), \quad y_B(t) = 0, \quad z_B(t) = \frac{c}{\omega_B} \sin \omega_B t$
電子密度分布 ρ_e $\rho_e(x, y, z, t) = \delta_B^3(x, y, z, t)$
 $\delta_B^3(x, y, z, t) = \delta(x - x_B(t))\delta(y - y_B(t))\delta(z - z_B(t))$

電子のエネルギー
$$U_{\rm B}$$
の変化量 $\frac{\mathrm{d}U_B}{\mathrm{d}t} = \mathrm{m}_0 c^2 \frac{\mathrm{d}\gamma}{\mathrm{d}t} = ec\beta \cdot \mathbf{E}$

Cavity内の電場分布, E

基本的なGaussian beam

Rayleigh Length, z_0

$$\begin{aligned} \mathbf{E}_{r}(r,z,t) &= \pm i E_{r}(r,z,t) \exp[\pm i \Phi_{r}(r,z,t)] \mathbf{e}_{r} \\ \Phi_{r}(r,z) &= k_{R} z - \omega_{R} t + \phi_{r} + \left(\eta(z) + r^{2} \frac{k_{R}}{2R(z)}\right) \end{aligned} \qquad z_{0} &= \frac{\pi w_{0}^{2}}{\lambda_{R}} = \frac{k_{R}}{2} w_{0}^{2} \\ \eta(z) &= -\tan^{-1}\left(\frac{z}{z_{0}}\right), \ R(z) = z \left(1 + \frac{z_{0}^{2}}{z^{2}}\right), \ w^{2}(z) = w_{0}^{2} \left(1 + \frac{z^{2}}{z_{0}^{2}}\right) \end{aligned}$$

断面方向の電場密度分布 h_{R}^{T} : Optical cavityの形状で決まる。 進行方向の電場密度分布 h_{R}^{L} : ミラーの帯域 $\Delta \omega_{R}$ で決まるものとする。

$$E_r = \hat{\mathcal{E}}_r h_R^T(x, y) h_R^L(z, t)$$

$$h_R^T(x, y) = \sqrt{\frac{2}{\pi}} \frac{1}{w(z)} \exp\left[-\frac{r^2}{w^2(z)}\right]$$

$$h_R^L(z, t) = \sqrt{\frac{1}{\pi c \Delta \omega_R}} \frac{\sin(\Delta \omega_R(z - z_B(t))/c)}{(z - z_B(t))/c}$$



 $\hat{\mathcal{E}}_r$:平均化された電場強度(後述)

Maxwell方程式から導かれる光の電場の変化

 $\left(\nabla^2 - \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2}\right) \mathbf{A}_R(x, y, z, t) = -\mu_0 \mathbf{J}(x, y, z, t)$ Maxwell方程式 $\mathbf{E}_R(x, y, z, t) = -\frac{\partial}{\partial t} \mathbf{A}_R(x, y, z, t), \qquad \mathbf{B}_R(x, y, z, t) = \nabla \times \mathbf{A}_R(x, y, z, t)$ $\nabla \cdot \mathbf{S}_R + \frac{\partial u_R}{\partial t} = -\mathbf{J} \cdot \mathbf{E} = 2c\varepsilon_0 E_r \left(\frac{\partial E_r}{\partial z} + \frac{1}{c}\frac{\partial E_r}{\partial t}\right)$ エネルギーの流れ $\frac{\partial U_R(t)}{\partial t} = \int_{V} \left(\nabla \cdot \mathbf{S}_R + \frac{1}{c} \frac{\partial u_R}{\partial t} \right) \, \mathrm{d}x \mathrm{d}y \mathrm{d}z \qquad S_R : \text{Poynting Vector}$

$$\frac{\mathrm{d}U_R(t)}{\mathrm{d}t} + \frac{\mathrm{d}U_B(t)}{\mathrm{d}t} = 0$$
 光と電子のエネルギー変化量は同じ。

平均化された電場



Pulse stacker model



ターン当たりのエネルギーロス $\delta_c << 1$ のhigh finesse cavityでは、以下の近似が成り立つ。

$$\Delta U_R \approx 2\varepsilon_0 \mathcal{E}_r \Delta \mathcal{E}_r = \mathrm{m}_0 c^2 \Delta \gamma$$

エネルギー増加量が電場に比例することが説明可能。

Gaussian Beamとの相互作用による電場の変化 II

変数変換
$$\alpha_B = \frac{k_B k_R^2}{4} \omega_0$$
 $n_B = L_B/2z_0$ $z_0 = \frac{\pi w_0^2}{\lambda_R} = \frac{k_R}{2} w_0^2$ $ck_B = \omega_B$

電磁石の距離L_Bで電場の変化量を積分

$$\Delta \mathcal{E}_{r} = -\frac{q}{2\varepsilon_{0}} \sqrt{\frac{2\Delta\omega_{R}}{\pi^{2}c}} \exp\left[-\frac{k_{R}^{2}\overline{l}_{B}^{2}}{2}\right] \int_{-n_{B}}^{n_{B}} f(\xi;\alpha_{B},\phi_{0x}) \mathrm{d}\xi$$
$$f(\xi;\alpha_{B},\phi_{0x}) = \frac{\alpha_{B}}{\sqrt{1+\xi^{2}}} \xi \sin\left[-\frac{1}{3}\alpha_{B}^{2}\xi^{3} + \phi_{0x} - \tan^{-1}(\xi) + \frac{1}{4}\alpha_{B}^{2}\frac{\xi^{3}}{1+\xi^{-2}}\right] \exp\left[-\frac{1}{4}\alpha_{B}^{2}\frac{\xi^{4}}{1+\xi^{2}}\right]$$

変数 $k_{\rm B}$ と $k_{\rm R}$ を含む変数 $\alpha_{\rm B}$ に対して、エネルギーゲインが滑らか。

- ある曲率半径 ($\rho_{B=1}/k_{B}$)のベンドに対して 幅広い波長 (波数 k_{R}) でゲインが高い。
- ある波数k_kに対して幅広い曲率半径(ρ_B _1/k_B)でゲインが高い。つまり、電子のエネ ルギー変化に対して鈍感なため、飽和しにくい。
 →蓄積エネルギーはcavityのlossで決まる。



20

Gaussian Beamとの相互作用による電場の変化 III



蓄積エネルギー U_Rの導出



蓄積エネルギーU腐

$$U_R = \frac{4\chi_c}{\pi\varepsilon_0} \frac{q^2}{\delta_c^2} \frac{1}{\lambda_R} \left(\frac{\Delta\omega_R}{\omega_R}\right) \exp\left[-k_R^2 l_B^2\right] I^2$$

I: Gaussian Beamに対する積分値、

偏向電磁石の曲率半径ρやRayleigh長z0、spot size w0の関数 λR:赤外光の波長、ΔωR/ωR:ミラーの帯域、χc:偏光定数

CSRとの相違点・類似点

- Lienard-Wiechert potentialで記述できないため、定義によりCSRとは言わない。
- 電荷量の2乗に比例し、バンチ長l_Bに強く依存する点は似ている。

□ FELとの相違点・類似点

- BENDの放射光程度の幅広い範囲で発振する。
- 帯域の狭い共振波長は存在せず、発振波長がミラーの帯域でほぼ決まる。
- Cavityに蓄積した光と電子でエネルギーの交換を行う原理は同じ。

Pulse stackerとの相違点・類似点

- 通常はレーザーをcavityに入射するが、代わりに電子バンチを用いている点。
- 蓄積率はFinesse = $\pi \delta c/2$ に比例するが、本手法では二乗に比例する点。(これ は電子バンチがミラーを透過しないことによる。)
- エネルギー増加量がcavity内のエネルギーでなく、電場に比例する点など、上記の点以外はほぼ同じ。

高反射率の多層膜ミラー

波長が数10 um ~ 数100 umの場合、

- □ 金属の反射率はおよそ98 %.
- 可視光などで使われている誘電体を用いた多層膜ミラーの製作が困難。



Development of high reflectivity mirror for terahertz region

FIG. 2. (Color) In (a) four layers of 23 μ m thick Si, and in (b) five layers of 36 μ m thick z-cut quartz, each separated by 75 μ m vacuum gap, create high reflectivity bands centered at $\lambda_C \sim 300-320 \ \mu$ m. The harmonic band centers are located at ~ 100 and $\sim 60 \ \mu$ m, respectively.

■ 薄い光学結晶と真空で多層構造をつくる。

- □ 反射率が高く、熱に強いFELのミラーとして提案された。
- 高次項では帯域を狭くすることが可能。
- ガンマ線生成では CVD diamondを使用予定。
 - CVD Chemical Vapor Deposition、化学気相堆積法 (原料ガスを分解し、基盤に堆積する手法)
 - 45umだけでなく、幅広い波長範囲で吸収が少ない(とされる)。

M.Tecimer et al, PRSTAB 13, 030703, (2010)

高反射率の多層膜ミラーⅡ

最も開発要素が多い

- 1. 円偏光の生成(ミラーで偏光を制御する場合)が困難。
 - 直線偏光の生成は大きな問題はない。
- 2. 波長45µmへの対応
 - 薄膜の厚さを薄くする必要があり、強度が不安視されている。
 - できれば真空層のかわりに、CVD Diamondと屈折率の異なる別の材料を探す
 必要がある。
- 3. 耐熱性
 - 10J近いパルス強度に耐える必要がある。
- 4. 高反射率
 - Finesse=1000πでは、多層膜を10層以上とする必要がある。
- 反射率の測定
 - 90%以上の反射率ではFELを用いてCavity ring-down法で測定。
 - 国内に適当なFELがない。

Optical cavityとγ線光子数



K. -J. Kim et al, Nucl. Instrum. Meth. A. 341, (1994) 351

Energy of γ -ray : 10 MeV Number of γ -ray, N_{γ} : 2 x 10¹⁰ phs./pulse Number of positron beam : 2 x 10⁸ /pulse at 3~4 MHz with quasi-CW the conversion efficiency is assumed to be 1% 100 times stacking is needed at the dumping ring

スペック

Electron bunch		Stacked CSR and optical cavity		
Electron energy	6 GeV	Wavelength, λ_R		45 μm
Normalized emittance	100 mm-mrad	Spot size w_0 at CP		250 μm
		Size w_0 a	Size w_0 at mirror	
Bunch length (rms)	24 fs	Rayleigh Length Number of cycles, $N_{\rm R}$ Deflection parameter, K		4.5 mm
Energy spread	< 300keV			100
Electron charge	3 nC			0.6
Beam current*	5 mA	Finesse F		500 π
* Heat load is estimated to be 300W for ERL type2 cavity developed by KEK.		Stacked CSR energy, $U_{\rm R}$		8 J/pulse
Beam dynamics and		Repetition rate		3 ~ 4 MHz
synchrotron radiati <u>on</u>				
	Bending radius for CS		2000 m	
Critical wavelength		h of CS	5 nm	
Cutoff wavelength		of CS	1 mm (h=10cm)	
Beam size at CP			60 µm ($\beta = 0.5$ m, $\eta \sim 0$ m)	

円偏光の生成

円偏光の生成方法については検討中

□ 偏向電磁石をヘリカルにする。

- 現段階で最も有望。
- 偏極度は取り込み角度による。20%から70%程度か?
- Optical cavityのミラーで円偏光のみを蓄積する。
 - p波とs波の反射率の違いを利用して、自然偏光を円偏光のみに変換する。
 - Optical cavityを立体的に組み立てる必要があり、設計は複雑になる。

Optical cavityを立体構造にする。

- ATFで行われている方法と同じ方法。
- 本手法でも円偏光が得られるかどうか検討中。

■ 外部から円偏光のseed光を入れる。

- 波長板や偏光板などの光学素子は存在する。
- 単独の電子バンチのCSRに負けない程度の強度が必要。(seed光がspontaneous光 に負けないことが重要。)

陽電子生成からDamping Ringまで



まとめ

ILC偏極陽電子源のための γ線源の提案

- ERLを用いたγ線源のILC利用について提案した。
 ✓ ERLは逆コンプトン散乱やCSR生成に向いている加速器である。
- より強度の高い中赤外線(λ=45um)を得るために、電子を用いたpulse stackerを提案した。

✓ インコヒーレントにCSRを蓄積する方法は若干光子数が足りない。

GeVクラスのERLを用いて、ILC偏極陽電子源のために必要なγ線を供給できると予想される。

✓ 中赤外線のミラー開発などや円偏光の生成方法の課題は残る。